

新刊 Book reviews

□林 将之：樹木の葉（山溪ハンディ図鑑 14）
A5 変形. 760 pp. 山と溪谷社. ¥4,540 + 税.
ISBN 978-4-635-07032-4 C0645.

大場・宮田：日本海草図譜を紹介したとき（本誌 82 巻 178 頁），これからこういうスキャナー画像を用いた図鑑類が，続出するだろうと思った。今日では発表する映像がカメラによるものか，スキャナー画像なのかを，添え書きする必要などなくなってしまった。本書は「実物スキャンで見分ける 1100 種類」と副題にあるように，日本産樹木のほとんどを網羅し，生葉の全形，部分を一覽でき，葉縁や毛の細部も観察できるように配慮されている。樹形，木肌，花，果実なども，必要に応じて示されているけれど，添え物にすぎない。配列は A P G III によっているが，これ迄の図鑑に必ずついていた「検索表」が無いことも，本書の特色である。

10, 11 頁に，検索の手がかりとなる特徴と，そのシンボルマークの一覧があり，12-40 頁にそれらの特徴を具える葉をすべて示して，その出現頁がわかるように配慮されている。多くの読者は，この「主要掲載種葉一覧」で，見たい頁を探すだろう。一方，本文各頁の小口上半には，その頁の植物に対する検索用「形態マーク」が 4 箇所に記され，添えられた文字と共に，パラパラめくりながら目的の頁を見つける仕掛けになっているのだが，これが意外と使いにくい。形態マークについては 10 頁に説明があるのだが，そのサイズは $2 \times 5 \text{ mm}$ で，色とパターンで区別するようになっている。しかしサイズが小さいために見分けにくく，パラパラと紙を送っている間に識別することが困難である。

10, 11 頁の葉の形態マークと総検索表に現れる形質は，一つ一つの要素に分解すると 20 件程度である。これらを独立の綱目として，小口の一定位置に割りつけておき，マークは色だけにしておく方が，使い易いのではないかと考えた。小口の長さは 204 mm だから，20 件の形質の位置を頁の上半分の場所に固定することは難しくはないだろう。昔もてはやされた「エッジカード」や「へり穴パンチカード」と同じ発想であるが，紙の裏表に別な種類が配置されているので，頁を左からめくる場合と右からめくる場合では，異なる形質表示になる場合があるので，一工夫が必要である。

また「上半分」と言ったのは，本書では一頁に二種類が示された場合がところどころにあり，下半分の種類の映像が小口の端まで続いていて，下や裏面の植物に対するマークと重なり合って見にくいところがあるためである。

こういう図鑑は従来無かったものなので，画像の提示方法ばかりでなく，使い方をはじめ，いろいろ工夫・発展の余地がある。葉脈の細部や葉痕やプラントオパールも，取り込める可能性がある。この次は草の図鑑を目指すことになるだろうが，映像の蓄積と共に，検索法をはじめ，図鑑としての使い勝手の良さについても，いろいろと新機軸を期待する。先に紹介した「大川：植物の特徴を見分ける本」が，参考になるだろう。

（金井弘夫 H. KANAI）

本書は「実物スキャンで見分ける 1100 種類」という副題どおり，生きている状態で葉をスキャンした画像を各ページに 1～2 種類づつ示し，これに，和名と学名，樹皮や実などの補助的な写真と簡潔な説明をつけている。最初に，調べたい植物にたどりつくために，葉の形と配列により 19 のパターンを見分けるための「総検索表」がある。その次に，それぞれのパターンごとに，縮小した実物の葉のスキャンをまとめて並べた「主要掲載種 葉一覧」がある。ここで見当をつけて，名前と詳細スキャンのある各ページを見ることになる。

簡潔でかつ情報量が多く，奥の深い本である。短時間ではとても見切れない。見知らぬ植物が何であるか調べるために本書を使ったらどのくらい役に立つかはやってみないとわからないが，おそらく日頃どのくらい植物を見ているかによってまったく違う結果になるだろう。はっきり言えることは，本書は葉の見方を鍛えるのに絶好の本だということである。標本室で標本を見るにしても，大きな植物園で実物を見るにしても，1100 種類という膨大な数の葉を比較する機会はまずない。そこで，本書のスキャンを日頃から何度も見ておくと，自分なりに葉の特徴が身について，野外で実物を見たときに「これがそうだ」ということがわかるようになるだろう。さらに解説もついでに覚えておけば，実物を見た時にそれを思い出し，植物そのものに対する理解もさらに深まるというものである。

ということで，さっそくこの本に挑戦すること

にし、名前を隠してスキャンから植物名を推定してみた。その結果、3割ほどの植物名はわからなかった。自分の力不足だったのか、あるいはスキャンでは葉の質感が再現しきれないところがあるからなのか、とにかく恐ろしい本が出たものである。一人で眺めて勉強するのも良いが、表にスキャン、裏に名前と特徴を示したカードを作って市販したらどうだろうか。仲間と遊びながらトレーニングができ、試験にも使えるかもしれない。

(邑田 仁 J. MURATA)

□長田敏行：イチョウの自然史と文化史 A5. 204 pp. 2014. 裳華房. ¥2,400+ 税. ISBN 978-4-7853-5857-0.

分子生物学専攻の著者が、現役時代からコツコツと集積した、イチョウに関するあらゆる情報の集大成である。イチョウの精子発見にまつわる平瀬作五郎の進退問題については、相変わらず不明な点が多いようだ。しかしそれを取り巻く人達の師弟関係、縁戚関係、出处進退などについては、詳細に記述されている。イチョウの属名 *Gynkgo* は、ケンペルによる *Gynkyo* の聞き違いであるとの説は、彼の通詞の長崎方言の忠実な記録である可能性が高いことが主張されている。幕末から明治にかけて、日本の近代科学の発展に貢献した内外の人達の業績が再評価されると共に、日本の文化が世界に伝わって行った経緯も、丹念に跡づけられ、また最近の分子生物学との関係にも触れられている。ザッと目を通して紹介記事を書くつもりだったのに、思わず最後まで走り読みしてしまった。一々紹介していられないので、目次の章題のみ示す。1. イチョウ精子発見はなぜ大発見か？；2. イチョウの旅路；3. 生きてる化石としてのイチョウ；4. 平瀬作五郎と池野成一郎の肖像；5. イチョウの繁栄と衰退のドラマ；6. イチョウは中国から日本へ運ばれてきた；7. そしてイチョウは世界へ広がった；8. 医薬品としてのイチョウ；9. ケンペルがイチョウを *Ginkgo* と呼んだ；10. ゲーテとイチョウ；11. 小石川植物園散策と歴史的背景；12. イチョウが教えてくれるもの；終章. この他に「コラム」と題した短文が各所に挿入され、いずれも充実した内容で、分類学や自然史の講義の話題を増やすことだろう。どなたにも「是非とも」とお勧めする。

(金井弘夫 H. KANAI)

□武田科学振興財団杏雨書屋（編）。遠藤正治、

加藤僖重、幸田正孝、松田清（著）：杏雨書屋所蔵宇田川榕菴植物学資料の研究 B5. 768 pp. 2014. 公益財団法人武田科学振興財団. 非売品(限定 600 部). ISBN 978-4-9907593-0-8.

第一部：資料と研究では、菩多尼訶経、二十四綱解、植学啓原、百綱譜、榕菴写生植物図譜について、四人の著者の連名で、それらの元になった原典の文面と、訳語の比較検討を行い、240 頁の文献、標本、植物図などのカラー写真と共に、今日われわれが用いている学術用語の起源や解釈を明らかにしている。

第二部：論考は、欧州でリンネの分類体系が普及しはじめ、それについての様々な反応が始まった頃の出版物の影響を受けながら、榕菴の知識が集積されて行ったことを詳細に検証している。

巻末の年譜は 46 頁にわたって詳細をきわめており、引用・参考文献は 255 名 569 件に及ぶ。

書籍の集積は、無用な物をただ積み重ねておくだけ、という印象を受ける人も少なくないが、それを利用する能力のある人材が現れるまで、保存・維持する努力が必要だと感じる。

(金井弘夫 H. KANAI)

□木下栄三：皇居東御苑の草木帳 A5. 209 pp. 2014. 技術評論社. ¥1,880+ 税. ISBN 978-4-7741-6384-0.

著者は建築家・画家。江戸の研究をしているうちに、江戸城内の建物の配置とそれらの細かい位置関係を確認しようと、現在の樹木のくわしい配置図を作り、その名前を調べたついでに、草についても記録したという。植物の名前は、人に聞いたり自分で調べたりしたようだ。

建築家だけあって、図面作りはお手のもの。たとえば 29 頁の二の丸庭園～汐見坂周辺図では、正確な地図に、サクラは個体ごとに位置が示され、引き出し線を付けて品種名が逐一記されていて、「桜マップ」としてまとめられている。それ以外の樹木や植え込みや茂みも、「緑マップ」として色分けされて、場所によっては主な植物が記してあるし、池の水草から鯉の種類まで記してある。52 頁の菖蒲田では、4 つの池に生える 122 株が、一々番号付けして描き分けられ、続く頁にはそれら 84 品種のカラー写真と、花のスケッチが示されている。写真はあることはあるが、手書きの画以上の役割は与えられていない。魚（エビ、カメを含む）には 2 頁、キノコには 1 頁、鳥には

4頁が当てられている。そればかりか、画家というだけあって、主な建造物や池辺からの景観も描かれていて、要するに本書を持って歩けば、自分の立ち位置を正確に特定できる上、下手な案内パンフレットではかなわない、高度な観察ガイドになる。

図鑑的な頁では1頁4点の植物が図示されているが、すべて著者のスケッチと彩色による。解説も単なる図鑑の孫引きではなく、著者独自の文章となっていて、紋切り型の観光案内図鑑とは一線を画している。チガヤの項では「... また古くは花穂を火口（ほくち）にした」と書いたあげく、「ワカルカナ？」と付け加えたり、42頁のホウライシダでは、「アジアントスは『濡れない』を意味する...」と書いた上、「シダハンドブック（文一総合出版）などを参照」と付け足している。アカモノがあるとは意外だった。「皇居の植物」（1989）

にはこの名はない。シロモノも載っているが、これはアカモノという名前の対比として言及しているらしい。

もう一つ驚いたのは、全巻手書き文字に満ちていることだ。活字体の文の面積は、たぶん全体の1/3ほどだろう。著者は本書の資料の準備に三年を要した、と書いているが、「たった三年で？」と、信じがたい。

本書は精緻な描画を目指す、いわゆる「植物画」とは一線を画しており、「こういう行き方もあるのか」と、肩の力が抜ける人もあるだろう。とてもすぐに読み切れるものではないが、読破するものではなく、ときどきあちこち開いてみて、楽しむのがよかろう。それよりも本書を持って東御苑へ行き、観察を楽しんでももらいたい。苑内の売店（あるかどうか知らないが）に置いたら、絶好の東京みやげになるだろう。（金井弘夫 H. KANAI）

89巻3号 正誤(2014) Errata in Vol. 89 No. 3 (2014)

ページ (Page)	カラム (Column)	行 (Line)	誤 (For)	正 (Read)
159	Left	↓15	cm, 5–10.5 mm	cm tall, 5–10.5 mm